九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「紅」「東」「吃飽了」

中里見，敬
東北大学大学院 ： 中国文学

https://hdl.handle.net/2324/6466

出版情報：日中友好新聞. 1636, 1993-01-15. 日本中国友好協会
バージョン：
権利関係：

心に残る中国語

8.3.(1)

㉑

「紅」「東」「吃飽了」

中里見　敬

映画『ラスト・エンペラー』の終わり近く、文革の場面で、信号が赤に変わると自転車が一斉に走り出すシーンがあった。文革の時代、「紅」はすべて革命的、前進的な意味を持ったので、赤信号を進めに、青信号を止まれに変える議案が出されたそうだ。

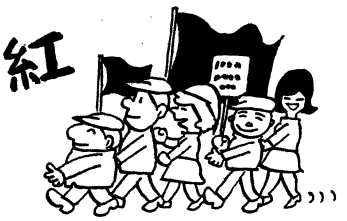
北京でデモ行進をするときには、東単から西単に向けて歩くのが通例だったが、「東」（＝共産主義社会）から「西」（＝資本主義社会）へ進むのは、マルクス主義の歴史理論に反するので、逆に西単から東単へ向かうべきだという主張がされたという。

外国語で話をするとき、言葉の意味はわかっても、相手が何を言おうとしているのか、よくわからないことがある。上の二つの例は、いずれも言葉の本来の意味を基礎としつつ、それを超える次元で別の意味が作用し始めたものである。記号学ではこれをコノテーションと呼んでいる。異なる文化に属するものが、コノテーションの多用された文章や詩を理解することは至難である。

次に、こちらの言ったことが、相手に別の意味で受け取られる場合を考えてみよう。

中国の人に食事に招かれて、厚いもてなしに感激した経験のある人は少なくないだろう。例えば、私が「吃飽了」と言ったとしても、相手はきっと皿に料理をとってくれるはずだ。私が皿を空にしていたらなおさらだ。このような場合、私が本当に満腹であるかどうかにかかわらず、相手は私が遠慮していると受け取ってしまうのである。

このように、言葉の意味は話し手の意図にかかわりなく、聴き手によって意味が決定されてしまうことがある。つまり、コミュニケーションとは一般に話し手の意図を相手に伝えることだと考えられているが、むしろそれは特殊に理想的な場合であって、実際にはコミュニケーションは絶えず摩擦にさらされ、いつ不通になるかもわからないスリリングな交通なのである。このことはコミュニケーションの非対称性と呼ばれている。

日本では国際化や相互理解の必要性が毎日のように言われているけれども、そのためにはこうしたコミュニケーションをめぐる困難を背負う覚悟も必要なのではないだろうか。そうした自覚を欠いたとき、単に外国語を使っての安易な自己確認と自己満足に終わりかねないのではないかと思う。

（東北大学）